

2017年  
7月3日  
月曜日

安岡 匡也 教授（社会保障）

# ホームレスを考える

ホームレスという言葉聞いたことはあるだろう。では、ホームレスとは何だろうか。家がなくて路上や公園のベンチにいる人と漠然とらえている方がほとんどではないだろうか。

はじめにホームレスの定義を考えてみたい。ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法による定義によれば、「ホームレスとは都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、日常生活を営んでいる者」とされている。これは多くの方が想定されるホームレスの姿ではないかと思う。しかし、この定義はかなり狭い。ビッグイシュー基金の若者ホームレス白書では、EU加盟国のホームレスの定義を紹介しており、その定義は「路上生活者」に加え、知人や親族の家に宿泊している人、安い民間の宿に

泊まり続けている人、福祉施設に滞在している人などを含む」である。

また、若者ホームレス白書では稲葉氏のハウジング・プアの定義に基づいて、ホームレスの定義を「屋根があっても家がない状態及び屋根がない状態」と定義している。

すなわち、これらのより広い定義に基づけば、部屋に住んでいたとしても居住環境によってはホームレスであるということになる。安定した1人で住むプライベートが確保された部屋に住むことではじめてホームレスから脱却できたということになる。

私は、ホームレス問題に関心があり、たびたび、大阪市西成区に足を運び、様々な施設を訪ね、色々と話を伺った。特に、釜ヶ崎支援機構が主催するスタディツアーやこどもの里が主催するホームレスの夜回り活

動は印象的であった。これらの活動の中で、様々なホームレスの方とお話をする機会を得た。お話を聞いていくと、以前は仕事をしていたものの、体の不調などで仕事を続けられなくなった結果としてホームレスになったという話が多かった。すなわち、誰でも起こり得る可能性がたまに彼らに当たったためにホームレスとなったということである。

ここから、私たちは常にホームレスになる危険をはらんでいることが分かる。大学を卒業して、就職しても職場が合わなかった、過酷なブラック企業での就労であったことから、仕事を辞めた場合で頼れる親族がいない場合、即、お金がなくなり、家賃が払えず家を追い出され、ホームレスに誰でもなり得るのである。

その誰でも起こり得るリスクをブールするのが社会保障制度の役割の1つであるが、現状を見てみると十分にその役割を果たしているとは言えない。

ホームレスとは自己責任と言われることもある。しかし、自己責任と片付けてしまうことは、ある種、考えることを放棄していると私は思う。まずは、ホームレス問題を自己責任と片付けるのではなく、誰にでも起きうる自分の問題として考えてみよう。ホームレス問題の本質が見えてくるはずである。

## 参考文献

稲葉剛(2009)「ハウジング・プア」山吹書店  
特定非営利活動法人ビッグイシュー基金(2010)「若者ホームレス白書 当事者の証言から見えてきた問題と解決のための支援方策」